

真田源三郎の休日 (サンプル版)

本文の冒頭一〇ページ分を読むことが出来ます。

この物語はフィクションです。
従って、登場する人物・団体・地名などは、
歴史上のそれらとは別物と思ってお覧下さいますよう、
お願い申し上げます。

「不思議な人だ」

というのが、第一印象でした。

初めは、その不思議さは主家である織田信長公の影響なのであろうと考えました。

ところが、どうもそうではないようです。

なにしろ、

「それは違う」

とご当人が仰るのです。それもカラカラと笑いながら。

「そりゃあ薫陶くんとうを受けはしたがね。何しろウチの御屋形様おやかたさまは強烈な方だ……御主は一度きりのお目見えだが、その一度であつても、十遍もぶん殴られたくらいくらいの衝動を喰らっただろう？」

宗兵衛殿は碁盤を睨み付けたまま仰いました。

その口振りときたら、どうにも織田様の御家中の内でも一、二を争う大名だだいみょう名様に連なるお血筋の……厳密に申せば、その

「大名」に今一步の所であり損ねた……お方とは思えないものでしたので、私はどのような顔をしてどのように答えればいいのか判断に困り果て、宗兵衛殿の顔を覗き込んだものです。

その顔が、相当におかしなモノであつたのであります。

宗兵衛殿は太い眉を八の字にして、逆に私の顔をじつとご覧に

なりました。

「源三郎。御主、儂を変わり者のように言うが、御主こそ相当な変人だぞ。大体、普通の若造は年上目上の人間に『あなたは不思議な人ですね』などと言いやせんぞ」

「普通の大人であれば、私のような小童こわらに『あなたは不思議な人ですね』と言われれば、碁盤をひっくり返してお怒りになりそうなものですけれども」

私は思った俣まに申し上げました。

といっても、子供らしい無邪気さのために素直に心根を口に出したのではありません。

いくら私が愚か者であつたとしても、父より年上で、——ということは、後々知つたことで、その時にはもつとずつとお若いのだらうと思つていたのですが——上役でもある方に、そのような軽口を言えば、私自身どころか私の家そのものに良くない影響を及ぼすであろう事は察しが付きます。

私はこの方を試したのです。

田舎者の若輩者の無礼な言葉を、この方はどう切り返すのだろうか、それが知りたかつたのです。

その頃の我が家といえは、大変に微妙な立場に立たされた、危険な状態でした。

勝頼公が武運潰えて御自害なさり、当家が祖父の代から仕え

た武田家は滅亡してしまいました。

禄を失った侍ほど寄る辺ないものはありません。ちりちりとなつた家中の者達は、各々保身を圖らねばなりません。

昨日の敵は今日の友とばかりに、ある者は北條を、ある者は徳川を、そして我が真田家のように織田を頼りました。

ただ、昨日の敵は、どう足掻いたところでやはり今日も敵なのです。庇護を受けられたとしても、それが表面だけのものもあることも、充分に考えられました。

現に、勝頼公を御自害に追い込んだ、信長公から見ればある種「殊勲者」であるはずの、小山田信茂、武田信光などは、むしろ信長公の不興をかって、磔にされるといふ無惨な……いえ、武田の遺臣から見れば当然の、最期を遂げました。

我々も、危うい立場にいます。

信長公のことですから、我が父が以前から北條氏直殿にも文を送っていたことなど、お見通しでありましょう。

まさしく、刃の上を歩いているようなものです。何の拍子に奈落へ落ちるか、あるいは刃に身を裂かれるか知れたモノではありません。

慎まねばならない事は、重々承知でした。

それでも私は試さずにはいられなかつたのです。

それほどにこの方は不思議な方だつたのです。

宗兵衛殿は恐らくは私の真意を測ろうとなさつたのでしよう、私の目玉をじつと、鋭い眼差しでご覧になりました。

私は脇の辺りからねつとりとした汗が出るのを感じましたが、それを表に出さぬようにと努めました。

私は宗兵衛殿の目玉を見つめ返しながら、考えました。

『この方が私を莫迦な若造と思つて下されば楽なのだが』

しかし、私は同時に「そんなことはないだろうな」とも思つていました。この方が、それほどまでつまらない人であるはずがないと。

ガシヤガシヤという音がしました。

音は、宗兵衛殿の手元から発しています。

やがて、パチリという、澄んだ音がしました。

宗兵衛殿は私の目を見たまま基箭をまさぐり、黒い石を一つ摘んで、碁盤の上に正確に置かれたのです。

「ほれ、儂の一目勝ちだぞ」

前田宗兵衛利卓殿は童子のように笑つて仰いました。

私はてつきり宗兵衛殿が何か私の考えつかないような言葉を私を叱るか、あるいは私の知らない含蓄のある言葉で私をさとそうとなさるに違いないとばかり思つておりましたので、少々驚きました。

驚きのあまり、目に塵の入つたような瞬きをして、欠伸をす

るように口を開けておりました。

その呆けた、阿呆のような私の顔を見て、宗兵衛殿はなんとも嬉しそうに、楽しそうにお笑いになりました。

「源三郎、僕は人の思うとおりに動くのが嫌いなのだ。人は『不思議』と言うが、これは生まれ付いての性分だよ」

お顔の作りといえ、彫りの深い荒削りで豪快な武刃者そのものな宗兵衛殿ですのに、その笑顔ときたら、すこし気恥ずかそうなの、乙女さながらに柔らかなものでした。

御蔭で私は、

『だから人が「白の四目勝ち」と思っていれば、それに逆らうのですね』

と、言い返す気も失って、碁盤の上から白石ばかり拾い上げ、碁笥にしまうより他になかったのです。

振られ男が狼狽を隠すかのように、もそもそと、です。

しばらくして、黒い石ばかり残った盤面を、宗兵衛殿の大きな掌がぎっばりと撫でました。

一度に取り除かれた石共はコワコワといったような籠もった音を立てながら、一息に碁笥の中へ落ちてゆきました。

碁笥の蓋がコパンと閉まったのと殆ど同時に、宗兵衛殿のお顔から笑みが消えました。

「ウチの伯父貴の……あの滝川一益が、御主の父親を大層気に

入ったようだ」

宗兵衛殿はあの、というところに力を入れて仰いました。

滝川一益様も不思議な方ではありません。

一益様は織田様配下の中で一二を争う勇将であられました。当家が元仕えていた武田家を追い詰め、勝頼公を御自害に追い

込んだのは、一益様の率いる一軍でした。

すなわち、我が家にとっては「主の仇」である方です。

もっと古い話をすれば、我が父の二人の兄、真田信綱と昌輝とが命を失った長篠の戦いでも、一益様は先陣を切って戦われたといえます。

すなわち、この頃は武藤喜兵衛と名乗っていた真田昌幸とすれば、一益様は兄の敵の一人であると言えなくもないのです。

とは申しましても、実のところ父は、あの戦においては滝川様のお働きよりも、あるいは伯父達の部隊と直接対峙しておいだった……つまり伯父達の命を奪った当人とも言える……仙石秀久殿のお働きよりも、遠く離れた場所に布陣しておいでだった徳川家康様を重要視しているようですが。

それはともかくも。

仇に等しい滝川左近将監一益様であるのに、父、そして私も、どうにもこの方を恨む気持ち湧いてきません。

諏訪で信長公に目通りさせていただいた後のことです。

父は一益様の与力とされ、信濃衆をとりまとめる役目を承りましたので、父と私、そして私の弟の源二郎も、上役となる一益様に挨拶をせねばなりませんでした。

このとき拝見した一益様のお顔は、皺は深いとはいふものの頬などはつやつやと赤く、髪はまだ黒々としておいでで、齢六十に近いとはとても思えませんでした。

一益様は父の前名が喜兵衛であると云うのをご存知であられ、「武田の重臣でありながら、のうのうと生き残り、こうして我らの前にいる。御主のような珍妙不思議な強か者が『木』であるものか。『鉄』だ『鉄兵衛』だ」

と仰って大いに笑ひ、以後父のことを『鉄兵衛』とお呼びになったのです。

その後、一益様には関東の地が新しい領土として与えられましたので、我らも当然付き従つて関東に戻ることになりました。かくて、一益様は武田の本拠地である厩橋城にお入りになったのです。

そして我ら親子と申しませば、元の居城である信州の砥石に移ることを強く望んでおりました。

我らは、すぐにでも砥石に戻り、さらにそこから親子兄弟一門を各々それぞれを東信濃と甲州・上州に散らして、危うく失いかけていた領土をとりまとめるつもりでした。

許可は、簡単にはおりませんでした。当然です。

新しく配下になったばかりの、元々は厄介な敵であった者共を、そう易々と遠く目の届かない所へ放つようなことは出来るはずがありません。

それでも私たちは、何時でも出立できるように、密かに旅装などを整えておつたのです。

そんな折、突然に一益様から「茶会をするから、厩橋へ来い」とのお招きが来ました。

私は一益様のご真意が図りかねました。訝しんでおりますと、「山家の田舎侍の不調法を看に旨い酒でも飲む御算段かも知れぬな」

父が大層な大声で言いました。私は慌てて

「まさかにそのようなことは」

辺りを見回しました。同じ部屋におりました弟の弁丸……源二郎などは、障子襖の隙から外を窺う素振りまでして見せたのです。

我々は「滝川様のお城」の中にいるのです。

その配下に組み込まれたとはいへ、我らが武田の遺臣であることに変わりはありません。言動には気を遣う必要がありました。

もっとも父のことですから、恐らくは『むしろ滝川のご家中

の誰ぞがこの声を聴いてくれればよい』考えていたのでしよう。

「まあ、あちら様の二期待に沿った振る舞いをする気など、更々ないがな」

と言った父の頬の上に浮かんだ笑みは、戦に臨んで策略を考へ回している時のそれとよく似ておりました。

お茶席は大層華やかな物でありました。

武田の家中でも茶をする者がなかったわけではありません。しかし茶道の中心においての織田様の旗下の方々が催す茶会には比べようがありませんでした。

茶器は唐渡りの物が多く、茶碗は天目の見事な逸品でした。その見事な茶碗を持ち、見事な御作法でお茶をお点てになったのが、目の覚めるような紅の利いた辻が花染の小袖を、厭味なく大柄な体に纏った、前田宗兵衛殿です。

さて、主賓たる一益様と云えば、小さな私が恐々として参加したその茶席で、我が父の顔を見るなり、なんと、

「良く聞けよ、鉄兵衛殿。上様は、大層に狡い御方ぞ」

と言いつ放たれたのです。満座の者達の……いえ、一益様ご本人と、宗兵衛殿と、それから我が父を除いた方々の顔が強張りました。

一益様が仰ったのは、大体次のようなことでした。

かつて織田信長公は一益様に、

「良き武功あれば、かねがねそなたが欲していた『珠光小茄子』を遣らう」

と仰せになったそうです。

珠光小茄子の茶入は信長公の蒐集品の中でも随一といわれる逸品であつたので、一益様は大層お励みになりましたが、なかなかこれを賜ることができませんでした。

そしてこの度、信長公から、武田家を滅ぼし、関東を平らげたその褒美を遣らうとの仰せがあり、一益様は、

「此度こそは、漸く『珠光小茄子』が戴けるに違いない」

と心浮かれ、踊るようにして御前に出れば、信長公は、

「上野一国と信濃二郡、関東管領の役を与える」

と仰せになりました。

「長の宿敵を破つたと言うのに、儂が本当に欲している物をくれぬのだぞ。儂はそのために、常に先陣を切り、また殿軍を守ってきたというのに……。のう鉄兵衛、その方も狡いと思うであらう？」

一益様は大まじめな顔で仰せになりました。

上野一国と信濃二郡はともかくとして、「関東管領」はおそらく名前だけで実を伴わないものでしょう。

私の記憶に間違いがなければ、彼のお役を正當に拝領なさっていたのは、代々上杉家でありました。そして、先代謙信公が没されてからは、足利將軍家はその役務を誰にも下知してはいないのです。

尤も、信長公が將軍家を「保護」なさっておられるからには、將軍家からのご命令を信長公が代理に下されることも考えられますでしょう。

それでも、件の役職に関しては、上杉謙信公の頃にはもう有名無実な名譽職に過ぎなかつたはずで、裏を返せば、これ以上ない名譽の称号であると言ふことです。

ですから、関東管領はともかくとしましょう。

上野一國と信濃二郡と言へば、武田が失つたものの殆どです。

そして、大きな声では申せませんが、出来れば当家が手に入れたいと願つたものです。願つてももままならない大きな代物です。

我らが羨望し垂涎した「それ」が与えられた、そのことが口惜しいと言われては、私などは一体どのような顔をすればよいのでしょうか。

一益様は、

「狡い、狡い」

と、拗ねた子供のよきに、繰り返し繰り返し仰られました。

耳順に近いご高齢の方が、です。

このとき我が父は、両の手に抱いていた天目の黒い茶碗を一益様の前に戻しつ、

「上様におかれましては、彦右衛門殿には一層励まれよ、という事でありましょう」

にこりとせず申しました。一益様が、

「この六十ジジイがまだ励まねばならぬと言うか？ 鉄兵衛は冷たいな」

唇を尖らせたその横で宗兵衛殿が至極真面目な顔で、

「そりゃあ、伯父御が鉄兵衛殿と御命名の御方に御座いますれば、ひやりと冷たいのも道理でありましょう」

などと仰られたのです。

口ぶりは何とも輕妙なものでしたが、顔つきは大変に忠実やかでした。

茶席にあつた一益様のご家中の方々は、これを輕口と取られようです。

下を向き、あるいは奥歯を咬み、あるいは扇を広げて面を隠すなど、それぞれのなしようで笑いを堪えておられました。

それでも宗兵衛殿は、律儀者そのもののような顔をしっかりと上げておいででした。

御蔭で私には、あれが輕口であつたのかそれとも本氣であつ

たのか、さっぱりわからなくなっていました。

その時宗兵衛殿が、涼しげな眼をだけをそつと動かし、なんとそれを私の方にお向けになったのです。

私は始め、宗兵衛殿は、私が茶席に、そして滝川様の「家臣」として相応しくない不謹慎な態度を取っていないかを確かめておられるのかと考えました。あるいは、そのような態度を取るなど諫めてくださっているのだとも思いました。

私は身構えて、何事も起きていない普通の茶席に畏まって座っている若造がするような、生真面目な顔をして、宗兵衛殿の眼を見つめ返しました。この場で笑って良いのか悪いのか判断しかねているという不安を、この方に悟られてはならないような気がしたからです。

すると宗兵衛殿は、口角の片側だけをほんの僅かに持ち上げられたかと思うと、片眼をパチリとつむられたのです。

まるで私に「笑っても良い、むしろ笑え」と言っておられるようでありました。

少なくとも私にはそう思われたのです。

しかし笑えと言われたからと云って、すぐさまに笑顔を作れるものではありません。

作れないとなれば焦りが生じます。

私は内心の焦りを人々に、特に宗兵衛殿に知られないようにと

考えました。自然に顔を背けようと、視線を反らす素振りでも父の方へ顔を向けました。

父は笑っていませんでした。真面目くさった顔をで一益様を見つめて、

「そのために、我らが与力として付けられたので御座います。う」

などと云うような、不遜なことまで申し上げさえたのです。一益様は尖らせた口で

「それはつまり、御主も上様の家臣として今までよりも一層に励むという意味だな？」

と仰せになりました。

このお言葉は、先の宗兵衛殿の軽口とはまるで逆の様相でありました。

お顔や仕草は子供じみたものでしたのに、声は鋭く重いものだったのです。

ご一同の肩の揺れがびたりと止まりました。

下を向き、あるいは奥歯を咬み、あるいは扇を広げて面を隠すなど、それぞれのなしようのまま、一斉に父の顔に鋭い眼差しを突き立てました。

私は息を呑みました。父の返答のしようで、当家がこの世から消え失せかねないのだと判じたからです。

源二郎も同じ事を察したようです。弟の顔を見ずとも、私にはそれと判りました。膝の上に置いていた汗ばんだ拳から、きつく握りしめた「音」が、はつきりと聞こえましたから。

誰も動かず、誰も物を言いません。

茶室は静まりかえりました。私に聞こえたのは、シュンシュンと湯の沸く音、私自身の心の臓の音、弟の抑え込んだ息づかいばかりでした。

実際には、それほど時が過ぎたわけではありませんでしたが、あの場では長い時のように感じられたのです。

あるいは日も月も止まってしまったのではないかとさえ思われました。

この静寂を良い意味で破るには、父が何か言う必要があります。

一 益様への返答です。

一番簡単なのは、一言「はい」という事でしょう。織田家のため、信長公のために働くという決意を、ご家中に示すことです。皆がそれを待っていました。

ところが、父は能面のような顔を一益様に向けたまま、何も言いません。

答えることを拒んでいるかのようでした。拒むことで、信長公を、ご家中の人々を、その力量を試そうとしている……私に

はそう思えました。

私が申すのも妙なものかもしれませんが、田舎者の小豪族が仕掛けるには過ぎた「試験」です。こんな「物の試し」をしては、命も家名も幾つあっても足りないでしょう。

私は小心者なのです。こんな、四面楚歌の暈の上などで死にたくはありません。

いえ、例えその場が戦場であって、目の前にいた方々が槍を構えた敵であったとしても、死にたくありません。

侍の子らしくないと思われるでしょう。それは仕方のないことです。しかし、私はいついかなる時でも、何とでもして生き延びたいと願っていますし、生き延びようと努めています。

ですから、この時も、生きて帰るためにはどうしたらよいのか、無い知恵を絞って考えました。

父は、あえて何もしないことを選んだのです。私などには考えの及ばないところですが、父はこれが一番の妙案……いいえ、この場合は企みと言い表した方が良いかも知れませんし、悪巧みと言っても良いかも知れません……と思ひ、無言を通していいのでしよう。

思い付いた当人は妙案と信じているが故になんの苦痛もないのでありましょう。しかし私は父ほど剛胆ではありませんから、無言のまま針のむしろの上に座り続ける事など、とても出来ま

せんでした。

私は、私が生き延びるためには、私自身が何かしら行動する必要があると考えました。

私が生き延びられれば、ここにいる父も源二郎も、それから仮住まいの姉妹や幼い弟、一門、一族、郎党を生き延びさせることもできるはずで。

傲慢にも程があります。それでも私はそう信じました。

信じたが故に、この場に充ち満ちている、張り詰めた、刺々しい、苦しい気を取り除く方法を、それこそ必死で考えました。

湯気の音の中から、キチリという別の音が聞こえました。金具が動く音に間違いがありませんでした。

咄嗟に『鉄砲』を思い浮かべました。

滝川一益様は鉄砲の名手と聞き及びます。ご自身ばかりでなく、ご一族やご家中にも名人が多いことでしょう。たとえ茶室にいますお歴々が銃を構えて居られないからと言って、安心できるはずがありません。襖一枚、障子一枚の向こうに、名人がいるかもしれません。

しかし私はすぐに自分の考えを取り消しました。火薬の匂いには人一倍敏感な私の臆病な鼻が、火縄の気配を感じ取らなかつたからです。

キチリ。

再びあの音が聞こえました。

宗兵衛殿の腰が僅かに浮くのが見えました。懐に手を差し入れておられます……頬に薄い笑みが浮かべて。

宗兵衛殿が何故腰を上げたのか、懐に何をお持ちなのか、その時はまるで知れませんでした。

私は覚悟を決めました。銃以外の別の武器に対する不安はまだありましたが、迷っている暇はないと確信しました。

ただ、万一宗兵衛殿を相手に一対一で戦ったなら、間違いない勝てないと言う妙な自信がありました。少なくとも宗兵衛殿よりは早く動かねばなりません。

私も懐に手を差し入れました。

途端、場の気配が、一層に張り詰めた物となりました。

数名の方の体が僅かに動いたように思われましたが、それに構っている暇はありません。

私は懐に忍ばせていた物を掴みました。

同時に、宗兵衛殿の手が懐から引き出されました。

無骨なお手に握られた、黒い、鈍く光る物――。

僅かに開かれた一面の扇でした。

私は安心しました。

これが武器ではないと誰が言い切ることが出来ましょう。

鉄扇ならば武器に他なりません。あるいは檜扇であっても

蝙蝠扇かわまりであっても、天下無双の武刃者が手にすれば、短い棍棒のごとき物と変わりありません。

私はするべき事を、早急になさねばならなくなりました。

宗兵衛殿が扇を再び懐に戻すか、どうあっても手放さずにはられないようにする、あるいは絶対に武器として用いることが出来ない状況に持つて行かねばならぬ……。

私は懐の中の細い棒きれを素早く引き出しました。

幾人かの腰が浮きました。眼差しが幾筋も私の手元に突き刺さりました。

方々の眼には一尺強の竹の黒い棒切れが写ったことでしょう。

私が宗兵衛殿の扇を武器と疑ったように、私が持っている物を武器と思つた方がいてもおかしくありません。

私はその用心深い方々が、私を抑え付け、締め上げ、斬殺するより前に、素早くそれを、口元に宛がいました。

裏返された女竹の横笛が、甲高い叫び声を上げました。

その時のご一同の顔を、私は忘れることが出来ません。目を見開いて驚愕する方がおられました。覚えず両の耳を手で覆い塞いだ方もおられました。皆様様に驚いておいででした。あるいは呆気にとられ、あるいは感心しておいでるようにも思われしました。

私は満足していました。

会心の「日吉」だったからです。

私が吹き鳴らしたのは、京に住まう母方の祖父から頂戴した、由緒ある能管のうかんでした。

それまでは何度息を吹き込んでも、湿った情けない音しか出せませんでした。私は日ごろから、己の技量の無さを恨めしく思っておりまして。

それがこの時、初めて抜けるような美しい高音の「日吉」を出せたのです。

この音を、実際に音を鳴らさずに伝えるには、一体どのようにしたのならばよいでしょう。

ヒヤウともヒヨウともキイともヒイとも言い表せません。文字や言葉に置き換えられようの無い音なのです。

何でも、この世とあの世を繋ぎ、この世のものならぬものを呼び出す音色なのだそうです。

無論、能舞台の上での演出として、のことです。

為手方シテカタが演じる神仏や鬼神、神獣や亡霊が現れるときに「日吉」は鳴らされます。

しかし私には、現れた演者が人でない事を観る人々に教える合図でも、人手ある演者を舞台上に呼ぶための合図でもない、と、私は考えています。

真田源三郎の休日（サンプル版）

平成二十五年十一月三日発行 初版

著者：錢澤恵み

編集人：錢澤守

発行：情報企画／錢沢時計店

〒三八六〇〇一一

長野県上田市中央四丁目十六番七号

電話：〇二六八―二三七八〇八七

URL：http://zenisawa-toketen.com/

twitter：https://twitter.com/zenisawa

不許複製・禁無断転載

